The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	越境の語りに耳を傾ける
Author(s)	平田, 由美
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 83-90
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

越境の語りに耳を傾ける

平　田　由　美

「日本学方法論の会」の開催に先だって送られてきたメモのなかで、杉原達さんはサイードの “overlapping territories, intertwined histories” を引いて、その複雑に絡みあった事象を「具体的場面に即して解きほぐし、丁寧に記述してゆく」、「平らではない一つの空間の中で人びとは生き、切り分けることができない状況が重畳していく」と記して、そのさまが何とかうまくとらえられることを願っている。

サイードの言う「重なり合う領土、絡まりあう歴史」を、《越境》という人びとの歴史的経験とそれがもたらした「今」という状況に照準を合わせて丁寧に描きつづけてきたのは、いうまでもなく杉原さん自身である。2003年の「越境の中の近現代日本」から、2010年の「いま、指紋押捺を再考する」をへて、今回の「越境と文化」にいたるまで、『日本学報』誌上で担当した特集を並べてみるだけでも、人間が生きる空間とそこでの経験に向き合う姿勢が一貫していることは明らかだろう。

第３回の方法論の会の報告者たちはそれぞれ、先のメモに込められた杉原さんの思いにどう応えているか。報告についての連想・妄想まじりの感想を記して責めをふさぐに先だって、大切な文章を一つ紹介しておきたい。

*

第１回と２回めの会の間にあたる2005年の秋、『金石範作品集』全２巻が平凡社から刊行される運びとなり、杉原さんは出版祝賀会で金時鐘さんらにつづいて祝辞を述べている。このスピーチは、これまで書かれたものとしてはどこにも発表されておらず、おそらく祝賀会に参加した方々の記憶以外に留められていない。しかし、「重なり合う領土、絡まりあう歴史」がわたしたちの生きる「くらしの場」そのものであり、にもかかわらずそれを認識し語るにはさまざまな制約や困難がつきまとっていること、そして歴史を語ることにおいて文学的想像力が持ちうる力と可能性とについて、これほどみごとに語っていることばをわたしは多く知らない。本誌の特集のために、許しを得て転載させていただく[1)]。

今里新地を下がったところで平野川分水路にかかる翠岩橋のたもとには交番があり、夜中の臨時の検問で、なまりのある人をあぶりだしています。私ども家族は、その橋のたもとに住んでいましたが、その家は、「四・三事件」の後で、事情をかかえて大阪に渡ってきた済州島出身の方から譲り受けたものでした。引越しを手伝ってくれた一人は、やはり済州島の出身で、釜山から大阪港へ密航し、吹きつけ塗装の仕事をしていた職人でした。この友人は後に入管に収容され、長崎県の大村収容所から強制送還されました。ふだんの何気ない生活を一枚、二枚と剥いていけば、そこには大阪と朝鮮が幾重にもからみあっており、思わぬ形で歴史が顔を出してきます。くらしの場を、歴史との関係のなかでみていくことの大事さをさまざまに思う日々でした。

そんなとき、不意打ちに、自分の想像力に突き刺すように食い込んでくるのが、金石範の作品群でした。近鉄今里駅前にある古本屋・日の出書房で、『鴉の死』の初版本（刊行・新興書房、1967年）を見つけたときのうれしさは、今も忘れられません。

いつしか私は、金石範文学を、「四・三事件」という悲惨な歴史的事件を理解するために読むのではなく、「具体的に制約されたきびしい情況のなかで、なおかつどのような生を生きるのか」を考える源として受けとめるようになりました。そしてそれが、文学作品に対する私の読み方の基軸となっていったのです。

1970年代、80年代、私は、一方で韓国における民主化運動の複雑な流れに心を動かされつつ、台湾を定期的に訪れていました。1947年の「二・二八事件」から50年代白色テロの結果、長期に囚われている政治犯の人権情報を確かめ、また民主化の流れにつながるためでした。戒厳令の解除が1987年。戦後台湾の時代状況を扱った有名な映画「悲情城市」の制作は1989年です。戒厳令解除から２年後であっても、まだ台湾内での上映が禁じられるのではという恐れから、まずベネチアの映画祭に出品して賞をとってはじめて、台湾で封切されるという時代でしたから、戒厳令のもとでの社会的圧迫のほどが推察されるでしょう。

訪台の際に、ときに私がかばんにいれていったのは、講談社文庫の『鴉の死』でした。新刊で手に入らなくなると、古本屋で見つけては買い求めました。政治犯の家族に運よく会えたとき、また渡しても問題ないと判断したとき、私は、ほとんど説明をすることなく、その文庫を置いてきました。それらがどのように読まれたのかはわかりません。ただ、台湾の国家暴力の犠牲者たちが、ほぼ同時期に進行した済州島の「四・三事件」に接する際の、ひとつの、しかしきわめて重要な筋道が、宗主国のことばである日本語で書かれた金石範文学を通じてであったことは確かだろうと思っています。

私にとって、文庫版『鴉の死』は、朝鮮・日本・台湾をつなぐ具体的な証、そしてそれらを関係づけて考えるための具体的なものそのものでした。大阪をそれだけで完

結したものとはみなさず、さまざまな関係性と歴史性のなかで考えたいという自分の思いの核には、他の作品ではなくこの文庫本を台湾へ届けることが深く作用していたように思います。

エスニック・マイノリティ、わけても移民労働や強制労働のために「境界」を越えることを余儀なくされた人びとがおかれている状況を、ホスト社会じたいの問題として執念く追究しつづけている〝杉原達の仕事〟――このスピーチは抑制された口調でありながら、その仕事が繊細な感覚と強靱な意志の両輪で担われた社会的実践であり、相互行為的な営みであることを明瞭に語っている。

今回、方法論の会で報告を行った３人の若い研究者は、杉原さんから多くを学びつつ、「何のために書くのか」という根源的な問いの答えを模索している。日本統治下の台湾でめぐり逢った朝鮮人と琉球人、沖縄から大阪大正区に移り住み、日本人や朝鮮人と交渉しながらスクラップ業を営んできた「ウチナーンチュ」、「外地」台湾へやってきた官僚や植民者としての日本人、本島人や先住民、そして彼ら／彼女らの子どもたち――取り上げられるどの移動も、従前の地域史や既存の研究領域の枠組みには収まりきらない。さまざまな出自や経歴、文化的背景をもった雑多な人々が創り出す空間とそこで営まれてきた暮らしは、「日本」という場やそれを対象とする研究を脱中心化して、人間の「生」を別の見方、やり方で考えることを迫ってくる。途方にくれるほど複雑に錯綜した空間で生きることを、「わたし自身」の問題としてどのように考え、語ることができるのか。この難問に取り組んでいる報告を聞いて、さまざまなことを考えさせられた。

＊＊

３つの報告は、帝国日本の「周縁」や現代日本の中にありながら「外部」とみなされた場所を立脚点にすることによって、そこから逆に「中心」にはらまれた問題を照射している。それらの問題群は、国民化や産業化とそれがもたらす社会変化や文化変容、つまりは《近代》をめぐる問題系としておおざっぱに括ることができるように思われる。

ほとんどすべての国家において、近代化は「国民国家」の構築プロジェクトそのものであったし、ありつづけている。「文明」の主体としての「（自）国民」の立ち上げは、その「国土」の「内部」における「文明あまねからざる場所」の創出や、「外部」における「野蛮な原住民」の他者化を伴う一方で、そうした場所の撲滅や他者の馴致の過程で生起する暴力は隠蔽されてきた。近代化プロジェクトが前提とし、わたしたちが今もとらわれている発展論的な歴史意識や単線的で均質な時空間概念のもとで不可視化されているこの暴力

を、「国民」内部の差異や亀裂、あるいは馴致という客体化によって図らずも立ち上がってしまう「主体」としての他者に目を凝らす点で、３つの報告は問題意識を共有しているといえるだろう。

台湾有数の貿易港を擁するキールンの空間を日本統治時代にさかのぼって、植民地都市建設という空間表象を考察した冨永悠介「基隆「水産」地域の形成と発展―国際都市・基隆としての面目―」[2)]は、この空間に潜む暴力を追尾している。ここでは、基隆湾内の漁港が移転整備され「水産」と呼ばれる地域を形成してゆく過程が丁寧にたどられ、水産業の発展による港湾の狭隘化の解消という当初の移転目的が、美観や衛生、漁民の生活改善という理念へと変化していることを明らかにして、この空間が漁民の「救済」と「強制移住」という「両義的側面」をもっていたことが析出される。

この「両義性」は、ロガスキー（Ruth Rogasky）のいう「衛生的近代性（Hygienic Modernity）」をただちに想起させる[3)]。感染症のコントロールなどを通して住民の生命を守る「よい統治」が、軍事力を背景にした強権的なものであると同時に、列強の支配を受ける地域のナショナリストたちとっては近代化の理想でもあるという「二重性」について、わたしは2011年に台湾新竹の交通大学で開かれたワークショップでの美馬達哉さんの報告で教えられた[4)]。美馬さんは、19世紀末から20世紀初頭にかけての東アジアで流行したコレラやペストなどの国境を越える感染症の拡大と、その対策としての検疫を考えるときの重要なポイントとして、①伝染病のような「病気のイメージ」が「外国人」と結びつけられること、②健康被害による労働力の損失と検疫による貿易上の損失という資本構造の間の政治的対立、③出入国管理を行う国家主権の国際秩序のなかの位置づけ、の３点をあげている。

このポイントは、植民地支配下の東アジアを対象として、絡みあった歴史の糸を解きほぐそうとしている報告者たちにとっても大きな示唆を与えると思われる。たとえば、台湾におけるコレラの流行を背景に、移住すべき漁民たちの住む土地が「水産窟仔」という「不気味さ」を付与されていることに「外来者恐怖症（ゼノフォビア）」的な他者イメージを見いだすことは容易であろうし、NHKドキュメンタリー『空がこんなに青いとは』[5)]に映しだされた、騒音と悪臭に満ちた「汚い街」に住む子どもたちが、公害から「救済」されるべき対象として視聴者に提示されていることも瞭然としているだろう。

しかし、基隆北部に新たに建設された漁民住宅への入居者＝困窮者の大半が日本人漁民であったという冨永さんの調査結果が浮かび上がらせるのは、「内地」や「植民地」の内部にある錯綜した差異の構造である。上地美和さんの指摘する、NHKドキュメンタリーが語ることを避けた、そこに多くの沖縄人が住んでいるという事実もまた、日本「本土」のなかに走る亀裂を指し示している[6)]（そして、「公害対策基本法」の制定が、「国民」の

健康と経済発展との間の政治的な妥協の産物であったこともけっして見逃すことはできない）。あるいはまた、「日台結婚」によって生まれた子どもたちへのまなざしに、「人種」間の混交を「民族の血」の汚染として恐怖する「文明」＝帝国の中心の住民たちをとらえているゼノフォビアとミソジニーとの結合を見ることも難しいことではないだろう。鄭卉芸さんのいう「「慣習」に依る特殊統治」が創出した「内地」と「外地」の間の境界を、彼ら／彼女らの存在は無にしてしまうからである。

強大な軍事力を後ろだてにして推し進められた検疫法や感染症予防法が、近代の《理想》としての「衛生」観念を基盤としていたのとまったく同様に、一夫一婦制という法制度もまた、近代社会を席巻した「ロマンチック・ラブ・イデオロギー」を強力な駆動装置にして、すべての人間を「強制的異性愛」へとかり立てていった歴史をもっている。イデオロギーとしての言説は、システムが制度化され自然化されることによって、その社会性や歴史性、とりわけそれらが法として社会に受け入れられる過程で振るわれた暴力やそこからの逸脱に対して科された処罰、強制的処遇は不可視化される。

台湾総督府の法制・行政官僚の記録文書から、新聞雑誌に現れた中国語や日本語の記事、台湾在住経験をもつ作家による小説まで、多様なテクストに目配りした鄭さんの報告は、近代の「法」としての一夫一婦制や家族制度が植民地における言説空間と密接不可分のものであったことをあぶりだす。「妾」制度が台湾固有の文化＝「民情旧慣」であるがゆえに「内地」とは異なる婚姻法の適用が認められるべきだとする議論にかんして第２回の準備会で紹介された総督府の高等法院長の見解――もともと「支那ノ律令」に基づいていた台湾の「妾」制度が、「北京〔ママ〕当リカラ遠イ」ために「妙ナ慣習」となり存続しているという所見――は、植民地における時間と空間をめぐる表象の典型としてきわめて興味深いものがある[7)]。

報告では簡単に触れられるにとどまり、テクストの精読と分析は今後の作業にゆだねられたが、庄司総一『陳夫人』（1940～42）はたしかに重要なテクストだと思われる。早く、1960年代から旧植民地文学の歴史化に取り組んだ尾崎秀樹は、「大家族制度とそれにともなう封建的な遺制」に縛られて生きる人びとを描いた『陳夫人』を取り上げて、「時代的・社会的背景、風俗の断片」が「台湾に育った作家の一人」である庄司の現実体験であり、作者にとって「描かなくてはおれないテーマ」であったこと、そして登場人物たちの理想と挫折、苦悩と諦念を通して描かれているのが植民地支配それじたいであったことを論じている[8)]。

尾崎はまた、新垣宏一の「城門」（1942）や坂口䙥子の「鄭一家」（1943）、「蕃地」（1953）などの物語を『陳夫人』の「系列」上に位置づける。日本人妻とその娘を通して「民族の問題」を語った『陳夫人』に対して、「城門」では、口に「皇民錬成」を唱えながら「皇民」

として恥ずべき蓄妾をしている父親の矛盾が、娘である「一人の台湾人女学生の眼」を通して描かれ、坂口の諸作品でも日本人、中国人、台湾先住民あるいは彼らの間に生まれ落ちた「混血」など、さまざまな登場人物の苦悩に寄り添うように語りの視点を転換させながら、植民地政策の暴力と「悲劇」を描き出していることに、尾崎は植民地作家としてのテーマの深化を見ようとしたのである[9)]。

植民地台湾に生きる人びとの多様な「生」を語ったそれらのテクストを、「内地」と「外地」とを問わず、同時代に書かれたテクストと「ならべ読み」[10)]するとともに、植民地朝鮮における文学テクスト――たとえば張赫宙の「仁王洞時代」（1935）や金史良の「天馬」（1940）など――と比較対照することによって、「家族制度」の矛盾のみならず、「近代」が抱えこんだ矛盾、植民地主義の複雑な相貌に新たな光が当てられることになるだろう。鄭報告が取り上げた1920～30年代の妾をめぐる論議でも、同時代の「内地」のメディアには、あたかもそれに呼応するかのような論調が見られる。近代初期の日本が迫られた法制度の整備が欧米列強との間に結ばれた不平等条約の改正や、そのために急務であった「文明開化」を背景にしていることを考えると、帝国の中心と周縁の境界線をめぐって繰りひろげられる民法の制定と適用範囲についての議論も、そうした「国際秩序」のなかのできごととして位置づける必要があるのではないかと思われる。

上地報告は、大阪の焼け跡に形成され、70年代には取り壊しと住民の移転によって消失した「沖縄スラム」とウチナーンチュたちのスクラップ業の実態をオーラル・ヒストリーの手法を交えた「生活史」として誌そうとしている。恥ずかしいことだが、大阪生まれの大阪育ちでありながら、「クブングヮー」と呼ばれる沖縄人の集住地がかつて大正区に存在したことを、わたしは上地さんの話を聞くまで知らなかった。金泰生の『私の日本地図』には、少年時代の彼が「大正区恩加島町の佐藤鉄工所で半年余り一緒に働いた知念良雄」についての印象深いエピソードがあって、つい先ごろも何度めになるかわからない読み直をしたにもかかわらず、である[11)]。

「江戸は諸国の入り込み」と呼ばれるほどの古い歴史や規模をもたないにしても、「東洋のマンチェスター」大阪もまた、第一次大戦後の急激な工業都市化以来、国内外のさまざまな場所から人びとが移り住んできた土地であった。『朝日新聞』は、「放置される「沖縄スラム」」という見出しのもとに、そこでひしめき合って暮らす1500人のうち沖縄出身者が３割を占めると報じていた[12)]が、では残る７割の住民はいったいどんな人たちだったのだろう。

スクラップ業に転じる以前、戦前のウチナーンチュたちが就いていたという炭焼きや養豚、運送業の荷役、河川の改修工事といった雑業が、戦前の朝鮮人によって担われていた「劣悪な労働条件」下の種々の仕事に多く重なること[13)]を考えあわせれば、「クブングヮー」

もまた、「重なりあう領土・絡まりあう歴史」の空間であったことに思い至る。エキゾチックな響きをもつこの土地の名は、地名起源説話や神話の「名づけ」について思索した市村弘正がいう「所与の環境を、改めて生きた固有名詞によって埋めつくすことによって、自分たちの生活空間として創造しなおす」[14]という行為を連想させるが、ウチナーグチで名づけられた場所に暮らしたさまざまな人びとは、互いにどのような関係を結びあいながら、どんな空間をそこに創造しようとしていたのだろうか。

＊＊＊

しかしそれにしても。「クブングヮー」とは異なって、「猪飼野」という地名が地図から失われてしまって久しい今も、その場所が強力な磁場をともなったトポスとして存在しつづけているのは、さまざまな詩や歌、小説がその場所について語り、それらのテクストが読まれつづけていることと切り離して考えることはできない。

「大阪のウチナーンチュ研究は、大阪の地域史に含まれるのか、あるいは、大阪のウチナーンチュは沖縄の地域史でどのように書かれているのか」と書きつけた上地さんのつぶやきのようなことばは、「在日朝鮮人文学」（とその研究）が「日本文学」（研究）であるか否かをめぐって繰りひろげられた議論にも似て、さして意味のある問いとは思えない。それでもなおそのことばは、現代沖縄文学は大阪の沖縄人をどう描いてきたのか、あるいはまた、文学研究はそれらの（ひょっとしたら書かれなかった）テクストをどう論じてきたのだろうかという問いとなってこちらへ投げかけられているように感じる――『大阪近代文学事典』や『大阪名作文学選』のような書物が編纂されているのだから、ことは「沖縄文学」だけにとどまらない。「大阪」を開いて、「さまざまな関係性と歴史性のなかで考えたい」と語った杉原さんの思いに、いかに応答することができるか。問いかけの射程はすこぶる深い。

注

1）もとのスピーチ原稿には冒頭のあいさつとしめくくりの言葉が記されているが、ここでは割愛した。

2）『現代台湾研究』43号、台湾史研究会、2013年３月。

3）Ruth Rogasky, Hygienic Modernity: Meaning of Health and Disease in Treaty-Port China（University of California Press, 2004）

4）美馬達哉「感染症と出入国管理」（『日台学者座談会　越境移動與漂流的記憶』国立交通大学社会與文化研究所、2011年１月、18～20ページ）。植民地エリートにおける〝伝統と近代〟に

ついては、土屋健治『インドネシア民族主義研究』（創文社、1982）が今もなお有益な示唆を与える著作でありつづけている。

5）「現代の映像」1970年7月10日放送。のち「NHKアーカイブス」で「少年と少女」として2000年9月17日放送。http://www.nhk.or.jp/archives/nhk-archives/past/2000/h000917.html［2013年9月29日閲覧］

6）ドキュメンタリー・フィルムにおける記憶の意図的な忘却については、テッサ・モーリス=スズキ「越境する記憶――映画・植民地主義・冷戦」」（伊豫谷登士翁・平田由美編『「帰郷」の物語／移動の語り――戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』平凡社、2014）参照。

7）キャロル・グラックは、「周辺の人々が、進化・発展・科学という一九世紀の枠組みに沿って、ナショナル・ヒストリーの中に場を与えられると、人類学的空間は歴史的時間と重な」ることを指摘している（『歴史で考える』岩波書店、2007、202ページ）。

8）尾崎秀樹「決戦下の台湾文学」、初出は『文学』1961年12月～62年4月。引用は『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971、180～182ページ）。

9）同前（197～198ページ）および「霧社事件と文学」（同、233ページ）を参照。

10）西川祐子『日記をつづるということ――国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館、2009）は、特定の作家やジャンルのテクストを「つづけ読み」＝通読するだけでなく、同時代の複数のテクストを「ならべ読み」＝併読することの重要性を説き、それを実践してみせている。

11）金泰生『私の日本地図』（未来社、1978、192ページ）。この物語にはまた、10歳の作者が年齢をいつわって働いたゴム櫛工場で出会った「知念さん」という女性に仕事の手ほどきをしてもらう印象的な場面が書き込まれている（88ページ）。

12）特集「ここに政治を」第88回、1986年7月15日。

13）梁永厚『戦後・大阪の朝鮮人運動：1945－1965』（未来社、1994、9～13ページ）。

14）市村弘正『［増補］「名づけ」の精神史』（平凡社ライブラリー、1996、140ページ）。

（ひらた　ゆみ　大阪大学大学院文学研究科教員）